

日常生活のあらゆる厄災は、超自然的存在との関係が崩壊したことの結果であり、二者間の均衡の破壊とみなされる。そしてイバンは、儀礼的行為によってその均衡の破壊を回復する。リチャードは、アダット違反に対する罰則は、違反の結果として生じる神や霊との均衡の破壊を修正することを目的としており、そこには呪術的、儀礼的效果が期待され、違反者に対して苦痛や損失を与えるためではないと述べる。こうした刑罰の觀念において、イバンのアダットは西洋社会で認識されている法とは異なることを、彼は強調するのであった。

とはいえ、リチャードの記述スタイルは非常に体系的であり、行政官としてアダットを実際に用いなければならない彼の立場が窺える。禁止行為を可能な限り簡潔な文章で述べ、各違反行為の料金はすべて金銭で定められている。しかしその一方で、イバンの世界観を背景にしたアダットを制定法として法典化することで、その本質が損なわれる可能性を彼は考えていた。そのためリチャードは、記述のなかでイバン語を多用し、そしてその語句やイバンの慣習に関わる説明を丁寧にすることで単なる制定法に陥らないことを意識したのである。

実際にリチャードが記録、編纂作業を行ったアダット記録にはイバン語や彼らの宗教的世界観の知識なしには理解しにくい内容も多く含まれている。アダットによって規定される違反行為は、イバン語ではプマリと呼ばれ、この言葉をリチャードは単なる慣習の違反ではなく、神や霊との関係の悪化として儀礼的不調和という表現で説明する。そして、比較的軽微なアダット違反の場合には、ジュンスランと呼ばれる、神々に捧げ物を

供える儀礼的行為が違反者には課されることを述べる。こうした説明を付与しながら彼は、行政官としてアダットの成文化に取り組みながらも、イバンの論理を維持することを目指したと言える。

また、サラワク独立後、イバンをはじめとするネイティブ主体の記録活動においても、彼の記述スタイルや現地語の説明などが踏襲されていく。こうした点において、彼の記録活動は、サラワクにおけるアダット記録の礎として位置づけることができるだろう。

タイ上座仏教と国家

一 はじめに

本発表では、現代タイの国家行政事業における宗教活動としての「官制仏教（行政仏教）」を、「サンガ（僧団）の仏教」と連動させ、公認化論（公認教制の形成）として一般化することを目的とする。その際、石井米雄（『上座部仏教の政治社会学』）における議論、特にエクレスシア（チャーチ）論に着目し、これを公認化論として鏗ることを目的とする。

この目的の背後には、先進国の宗教社会学的なテーマ（世俗化、私事化、脱私事化など）と、途上国における宗教研究の主要なテーマ（国教化・公認教化、宗教・民族紛争、宗教的ナシヨナリズムなど）の、地域的かつディシプリンのな知的棲み分け状況を問い直し、同時代的な現象として関係づけるという問題意識がある。

矢野 秀武

二 石井米雄『上座部仏教の政治社会学』(一九七五)

石井の書籍をここでとりあげる理由は、一つには上座部仏教研究の古典として日本の宗教研究者の間で重視されていること、さらに石井自身が述べているように、石井のこの書籍刊行後、上座部仏教と国家の関係に関する体系的な研究成果がみられず、今でも石井の研究が重視されていることなどがあげられる。

石井はタイの上座部仏教を事例に、脱俗のサンガと世俗社会(一般民衆の生活世界および王権や国家)が、どのようなつながりを持つかに焦点を合わせ、四つのモデルを提示した。つまり、一般民衆の生活世界とサンガの多様なつながりの社会的構造モデル、上座部仏教の組織化に関わる仏教エクレスシアのモデル、王権・正法・サンガの相関モデル、立憲体制下における国家とサンガ・王権の相関モデルであった。

三 石井の議論の問題点

石井のこの書籍の後、文化人類学による研究蓄積が増加し、特に一般民衆の生活世界とサンガとの関係について実り多い成果が表れた。しかし、サンガと国家との関係については、進展は見られなかった。理由の一つは、石井の使用した概念が比較研究に適用しにくいと言った点が考えられる。例えば、王権論への注目、王権不在の上座部仏教圏の国家のモデルにはなりにくい。また、トレルチのチャーチ論・ベッカーのエクレスシア論を下敷きにした、仏教エクレスシア論は、他国の現象に応用可能性があるのだが、エクレスシア(チャーチ)概念における中世キリスト教モデル故の偏り(カトリックへの偏り、近代性・ナショナル化・植民地化論の不在)から、比較研究への扉が開かれ

にくかった点も指摘できる。

四 エクレスシア(チャーチ)論から公認化論へ

そこで本発表では、石井のエクレスシア(チャーチ)論の可能性を引き出すために、宗教の公認化論として鏗々たることを試みた。それは、国民国家が政治や世俗性の優越性を保持しつつ、近代化を進めるために、諸宗教の影響力や集団や象徴を機能的に配置換えすることであり、具体的には、少数のカテゴリーに宗教を区分けし、ナショナル化・標準化し、さらに教育などの行政事業を通じてこれを促進していくものである。先進国の政教分離・世俗化とは異なるが、政治・世俗性の優位をつくる近代化のオプションと言えよう。

これは、国家による宗教のコントロールや、コミュニケーション(宗教民族対立)を助長する面も否めないが、他方で宗教が公共域に参加する回路をつくり、複雑な宗教民族対立を縮減し討議のアーリーナを形成する試みであるとも言えよう。

バッファゾーンのチベット仏教

——リメ運動の展開に焦点を当てて——

別所 裕介

本論の目的は、今日のチベット仏教のグローバルな布置を「バッファゾーン(緩衝領域)」という視点から捉えることで、ヒマラヤ仏教圏を媒介とした研究方針にひとつの展望を開くことにある。そのために、近世に起源をもつ教流である「リメ(ris med)」に焦点を当てて、その時代的展開と地域的連環の具体像から前記の視点を説き起こす。